海を渡るゾルブの人々

——南オーストラリアにおけるドイツ少数民族「ゾルブ」——

中　村　浩　平

はじめに

19世紀の前半，ドイツのプロイセンやザクセンからアメリカ，カナダ，オーストラリアなど海外に向かって，夥しい数の人々が祖国の地を去った。彼らが故郷を捨て，新しい土地に赴いたのにはさまざまな理由があったが，その主なものとしてヨーロッパにおける人口増加が挙げられる。「ヨーロッパの人口は，1800年の1億8700万人から，1850年の2億6600万人（43%増）へ」[1]と前例のない程の規模で増大した。その結果，農村の疲弊[2]，さらに都市化，工業化がもたらされ，社会的矛盾が増大し「ヨーロッパの農村住民を，大挙して移住の波に乗せることとなる。」[3]その数は19世紀全体を通して5200万人もの膨大なものになると言われている。ドイツからは，アメリカに向かっただけでも1840年代に43万人，50年代に95万人と言ったように，まさに人口増加の圧力が多くの人々を海外へと向かわせたのである。

以上のような背景から，さらに，プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世によって行われた宗教弾圧という社会的背景[4]もあり，1838年には信仰に目覚めたルター派の信徒たちの海外への脱出が始まった。プロイセンのルター派信徒たちは宗教的自由を求めて南オーストラリアへ移住（移民）した。彼らは新しい土地で自分たちの信仰を守れる理想郷を建設しようとしたのである。南オーストラリアに新天地を求めた彼らの多くは，アデレイドおよびその周辺にドイツ人の移民地を建設した。そしてこれらドイツからの移住者の中に少なからぬドイツ少数民族「ゾルブ」の人たちがいたのである。[5]

ゾルブ民族は元来先住者としてドイツ東南部地域に住むスラブ系の住民で，固有の言語（上ゾルブ語と下ゾルブ語の二つの方言）を持ち，独自の伝統と文化を今日も保持している。しかしこれまで独立した国家をもつことはなく，ドイツ人と混在して，あるいはドイツ人に取り囲まれて住んでいた。それ故ゾルブの人々は少数者として，多数者のドイツ人のいわば大海の中で自らの民族としてのアイデンティティを確保すべく，ドイツ人とときには拮抗し，対立し，反目し，ときには協調しながら共存してきた。ゾルブ人として民族の存立をいかに保持するかは彼らの歴史的課題であった。ドイツ人との歴史的関係に於いてはそれゆえ平等と言うよりも圧迫—被圧迫の関係で，ゾルブ人による抵抗が基調としてあると言えよう。[6]

ところでゾルブの人々が移住（移民）しようとした理由は一体何であろうか。「… ゾルブの人々のドイツを去った理由は複雑である。ナポレオン戦争，軍役，ドイツ人地主への服従，失業，飢餓，上ラウジッツ地方（ザクセン）の人口過密に影響されて，移民が彼らの唯一の解決策であるように思われたのである。」[7]そのため彼らは海外へ赴いたが，その大部分は北アメリカ（テキサス）へ向かった。しかしまたかなりの部分（約500家族）がオーストラリアへ向かったのである。オーストラリアは当時すでにヨーロッパ移民の目的地の一つになっていた。

南オーストラリアで彼らは自立した民族として当然自らの言語「ゾルブ語」を使用したが，それは主として家庭内に限定され[8]，広範なコミュニケーションの手段としてはドイツ語が用いられた。しかしその結果，ゾルブ語を用いる機会が少なくなり，最終的にはドイツ人共同体に吸収され

ることになった。言語はその民族にとってアイデンティティそのものである。民族の存立基盤としての言語の使用が減少および消失することは必然的にゾルブの人々にドイツ人との同化を強いたのである。

19世紀初頭からのドイツにおける彼らを取りまく社会状況はきわめて厳しかった。土地改革に起因する社会的転置，人口過密，経済的困窮に加えて，信仰弾圧がルター派信徒である彼らを苦しめた。こうして彼らはこのような閉塞状態から脱するために，海外移住への道を選んだのである。

本稿では，従って，このようなゾルブの人々に焦点をあて，先ず彼らの移民にいたる動機の背景を，次いで南オーストラリアでのドイツ人との共存，および同化など移民としての在りようを含めて，以下その足跡を追い求めてみたい。

1. ラウジッツにおけるゾルブ人とその背景

ゾルブ人の故郷は古来ラウジッツ（Lausitz/ゾルブ語でŁužica「沼地，湿地」）と一般に呼ばれている地域で，ドイツの南東部に位置（現在の行政単位区域ではブランデンブルク州とザクセン州にまたがって所属）している。[9]この地域は地理的に，南のラウジッツ山地に連なる上ラウジッツと北の平地の下ラウジッツの二つの部分に分けられる。この地域には上ゾルブ語と下ゾルブ語という主要な2つの方言があり，この2つの方言間の会話は難しいが，不可能ではない。そして両方言の中間地帯に，両方言を橋渡しするような変種の方言があると言われている。さらに一般的なコミュニケーションの手段としてドイツ語が用いられている。

ところでゾルブ人はおよそ西暦500年頃，ゲルマン民族大移動にそって，エルベ河とザール河に挟まれた地域に移住してきて，600年頃までに定住したと言われている。彼らは，その後ポーランドに征服されたり，かつてこの土地を通り過ぎていったドイツ人が再び東方へと戻ってきたさいに侵略され，さらにボヘミアやハンガリーに支配され，後に下ラウジッツはプロイセン王国に，上ラウジッツはザクセン王国に取り入れられたと言う歴史を持っている。ゾルブ人は凡そ1000年前にその独立を失い，二度と再びそれを手にすることはなかった。彼らはそれ以後1000年間つねに外国支配の下で生きてきたのである。しかもこの間一貫してゲルマン化が行われ，ゾルブ人はドイツ語を学び，かつドイツ人社会へ加わることを強いられた。しかしゾルブ人たちは国家こそ持たなかったが，その間彼らの言語，歴史，文化を持ち続け，民族性をも保持してきたのである。

強力なドイツ植民地化の時代を通して11世紀に行われたゲルマン化は，ボヘミアやハンガリーの支配下でさえも止むことはなかった。ボヘミアやハンガリーによる統治はドイツ人住民の減少やドイツ人貴族の地方支配層からの排除を意味しなかった。単にトップが変わったに過ぎなかったのである。ドイツ人は都市に留まり，ゾルブ人の犠牲の下でギルドや商業活動を支配した。[10]ゾルブ人たちは都市の限られた区域か都市の城壁外に居住することが許された。たとえば，バウツェン（上ゾルブの中心地）の聖ミヒャエル教会はゾルブ人のための教会であるが，市の城壁外に建てられている。ドイツ語の知識があらかじめ要求され，社会的に認められようと思うものはドイツ語を学ぶ必要があった。ゾルブ人農民は農奴として領主のために働き，以前に彼らが所有していた土地のために権利を得ようと苦闘していた。彼らは異国人によって支配された状態にいたので，生活は非常に厳しかったのである。

ゾルブの人たちがキリスト教に完全に帰依したのは12-13世紀であり，おそらくヨーロッパでキリスト教化された最後の民族だろうと言われている。キリスト教は本来ゾルブ人たちにとっては，いわば敵の宗教であり，彼らは教会とドイツ人貴族の両方から二重の圧力を受けていた。彼らは抵抗した。しかし一度帰依すると，彼らは心豊かな信仰と強い宗教的感情を表した。最初はローマ・カトリックであったが，彼らは宗教改革を本来のキリスト教への回帰として認め，大多数がルター派になった。その時以来ルター派教会がゾルブ人の主要な宗派となった。宗教改革はゾルブ人にとって重要な出来事であった。というのはルターが民族の固有語（母語使用）を強調したからである。ゾルブ語は基本的には話し言葉として家庭内のみ

で用いられていたが，宗教改革が始まってからは，教会の礼拝でも用いられるようになった。宗教者たちは聖書，賛美歌集，祈祷集をゾルブ語に翻訳した。[11]しかしドイツ語がつねに外部世界とのコミュニケーションの手段であった。

宗教改革に続いた30年戦争はヨーロッパ，ドイツは勿論，ラウジッツをも荒廃させた。軍隊がラウジッツの上を行きかい，新・旧両方のキリスト教徒が建物を破壊し，略奪し，市民を殺害した。城塞都市バウツェンも1634年に炎上した。30年戦争はゾルブ人社会にとって大きな打撃であった。もはや小さな人口では甚大な生命の損失は補えず，荒廃した地域の人口を増やすことはできなかった。結果として過疎になった地域はドイツ人によって埋められた。ゾルブ人地域は狭められたのである。

その後ザクセンは1807年にコトブス（下ラウジッツの中心地）を領地に加え，1815年まで全ラウジッツを保有したが，ナポレオンと同盟したため，処罰として下ラウジッツの全部と上ラウジッツの大部分をプロイセンに委譲した。プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世はカルバン派であったが，プロテスタントの両派，ルター派とカルバン派を単一の国教会に統一しようとした。多くゾルブ人たちは結局この宗教政策を受け入れがたいものとみなし，これを「彼らが故郷を離れる理由のリストに付け加えた」[12]のである。

ドイツの19世紀は海外移住の世紀であったと言われる。当然のことながら，ラウジッツも例外ではなかった。もともと少数民族なので人口は多くないのに，[13]それでもかなりの数の人々がこの土地から新天地を求めて海外へ向かった。海外移住の動機として，人口過剰，農村疲弊，食糧危機，経済貧困，政治抑圧，宗教弾圧など様々な要因が挙げられるが，大別すると，1. 経済的動機　2. 宗教的動機の2つになるであろう。

ゾルブの人たちの海外移住の動機にはこの2つとも含まれるが，一般的傾向として，下ゾルブの人たちはどちらかと言えば宗教的動機よりも経済的動機に重きを置いており，それに対して上ゾルブの人たちは経済的動機よりも宗教的動機に重きを置いていると言えよう。さらに下ゾルブの人たちと上ゾルブの人たちの間には宗教的見解で質的な相異がみられる。小論では，宗教的要素の少ない下ゾルブの人たちよりも，多い方の上ゾルブの人たちにより重点を置き見てみたい。

2. 移民への衝動

数世紀に渡ってゾルブの人たちは経済的に，政治的に抑圧を受けてきた。多くのゾルブ人はすでにドイツの他の地域に移動したり，仕事を求めて他の中欧諸国に出掛けたりするといういわばヨーロッパ内部を移動していたが，[14]ラウジッツに戻ってこないこともしばしばあった。今や着実な小さな流れが強力な大きな流れへと爆発的に変わった。この土地に千年以上も前に移住して以来，初めてゾルブ人たちはどこかへ移住しようと言う強い衝動を感じていた。即ち，海外への移住が初めて視野に入ってきたのである。[15]そしてそれは確かに彼らを根本から揺さぶり，さらに根こそぎにするような激しい変動を求めたのである。その根本的な原因は何だったのだろうか。

先ず最初に宗教的抑圧が考えられるが，上ラウジッツの人たちを除いて，ドイツ人のルター派信徒が1838年にザクセンやシュレージェンからオーストラリアへ渡った時に比べると，それほど大きな役割を演じてはいないと言えよう。下ゾルブの人たちの場合は，移民の第一の原因は経済的なものであったと思われる。[16]

次に戦争の恐怖が考えられる。たとえば，ノイキルヒでは多くの人たちがオーストラリアへの移住（移民）運動に加わっている。1811年から1813年にかけてゾルブ人の故郷はナポレオン軍と同盟軍によって何度も戦場にされ，ナポレオンは実際にノイキルヒに露営し，膨大な軍隊と軍馬の食料や飼料を調達した。1840年代でも多くの老人たちは依然として同胞の死を嘆き，虐殺者たちの生々しい記憶をもっていた。若い人たちは戦争行為の再現を恐れ，いかなる犠牲を払っても，再びあのような状況に陥るのを避けようとした。そのためには，この土地を去るしかないと考えたのではないかと思われる。

さらに封建主義とその崩壊も考えられるであろう。数世紀に渡ってゾルブ人たちは，彼らが大事

にしていた社会正義や個人の自由などを奪い取られてしまったと感じていた。500年前に，征服者たちはゾルブ人指導者を追放し，あるいは殺害し，ゾルブ人の土地を奪った。ドイツ人たちがラウジッツの土地貴族となり，ゾルブの人たちは農奴のレベルまでおとしめられた。封建領主の下で彼らは貧困と屈辱の状態に置かれた。彼らは自分たちの土地にいながら市民的権利を完全に否定されたのである。

ここで抑圧されたゾルブ人の叫びの例を見てみよう。[17]

血の裁き

宗教裁判所よりもはるかに残酷な
ここ村の法廷に座っている

ここでは判決は迅速には下されず
急いでも一生はかかる

ここでは人間がじわじわ苦しめられる
ここは拷問部屋だ

そして嘆息が，自暴自棄の証人として
幾重にも集められる

領主は20人で，みな裁判官だ
家来もみな仲間内だ

事実を覆い隠す代わりに
家来どもは拷問をする

悪党だ，お前たちは　悪魔と同類だ
地獄の悪党だ

お前たちは貧乏人の財産を食い潰している
お前たちは報いとして呪われるだろう

（詠み人知らず）

しかし，1848年の農民蜂起の結果によって，ゾルブの人たちはついに時代遅れの憎むべき封建制度の終末を見たのである。

彼らの歓喜はしかしすぐに冷静な現実に戻った。というのは，封建制度は彼らの上に重荷を課していたが，皮肉にも，封建制の崩壊によって，新たな重荷がさらに課されたのである。地主たちは，もし農民たちが耕作したいと思う土地を買うなら，彼らに自由を与えると同意した。大多数の農民にとって，このことは，彼らが農奴の身分を脱する代わりに，終生金貸しの隷属状態に置かれることを意味した。これに加えて，土地所有者たちはさらに，彼らの所有地で農民たちが仕事を求めたり，従事するのを出来ないようにした。その結果，広範な失業を生み出すこととなった。[18]このようなことが多くの人々の考えを変えさせ，どこか海外へ移住して移民として新しい生活を始めようとする原因となったのである。

また凶作と食糧危機が重なった。1844年には穀物の収穫に失敗した。翌45年にはベト病のためジャガイモの収穫が壊滅的になり，次の年には初夏に季節はずれの猛暑が穀物をだめにした。ベト病が再びジャガイモを襲った。多くの人々は，とくに状況がまさに悪化した1948年に，困難な状況から脱出しようと方策を探し始めた。パンは僅かなライ麦に野草や木の根を混ぜて焼かなければならなかった。空腹で絶望的になり，人々は，週1度の市場で，空の売り台を前にして，食物を口喧しく要求した。醜い光景が展開され，商売は停止した。ラウジッツの見通しの暗い状況から脱出する唯一の道として，移民がこれら意気消沈した人々に光明を与えるものとして今や見られるようになった。こうして「農業危機，つまり不作・凶作，その結果としての食料危機が周期的に発生した」[19]この時期に，海外への移住者が増加したのである。

移住地として当時ウクライナやロシアの肥沃な平原にあるドイツ人の入植地が知られていた。これらの地域はラウジッツからそれほど遠くはなかった。しかしウクライナは当時一揆があったため除外された。南アフリカと南北アメリカが候補地として残っていた。そのとき新しい名前が注目された。すなわち巨大な南の国，オーストラリアである。

この5番目の大陸は労働者を求めていた。土地が無償で提供され，斡旋業者がこの約束の地への旅費を無償で提供する手はずを整えているとい

う，根拠のない噂が暫くの間人々の間に広まった。確実なことはよい小麦畑がすでに利用可能であるということだけであった。人々の関心は，とくにすでに移民した人たちが熱狂的にオーストラリアについて書いて寄こしたときに，着実に高まった。これらの手紙は村から村へ，家から家へと読み継がれた。[20]

次に，その中の一例を挙げてみよう。[21]

「ここの土地は非常に良好で，水は，井戸を掘ると，至る所で出てくるが[22]，水の流れる川はない。土地全体に牛や羊がたくさんいるが，家畜には家畜小屋はなく，夜は囲いの中に入れられ，朝早く再び囲いの外に出される。…家畜は夏には餌を与える必要はなく，冬も，絶えず雨が降るので，餌は十分である。ドイツから来た者は誰でも暑さには耐えうる。…当局は土地を安く売っている。1アッカー当たり，6ターラー20新グロッシェンである[23]全員が自分の家を建てているが，適当な建材が少なく，硬材を用いなければならない。樽材や板材は貴重である。…野生の動物については何の不安もない。若干の野生の犬以外には危険な動物はおらず，しかも野生の犬は人間を恐れている。ここの土地は広大な平地があり，ときには数マイルにも及ぶ。森はどこも樹木が少ない。オーストラリアへ移り住もうとおもうものは，唐檜や樅の木の種を持ってくるが良い。」

この手紙の内容は，良いこと尽くめのような感じで書いてあり[24]，楽観的すぎるような気もするが，厳しいドイツの生活環境から抜け出たものには，事実このように感じたのであろう。しかし客観的に見て，人を惑わすような内容である。

やがて一大移民運動が起こる。海外へ移住しようとする欲求はとくに貧しい人々や大家族のなかに強かった。彼らは，個人の自由と自分の土地を所有できるという考えに最も惹かれた。かくして彼らはオーストラリアへ旅立つことになったのである。

当時ドイツからオーストラリアへ行くのにはハンブルクとアドレード港を結ぶ航路のみであった。300トンから500トンの3本マストのバーク船で，[25]18週から24週間の船旅であった。船客は各々運賃の100ターラーのほかに，寝袋，食器類，ナイフ・フォーク・スプーンを用意しなければならなかった。航海中の食物は船会社から提供された。酢キャベツとジャガイモはいつも食べ放題，生ハム，塩漬け鰊，チーズ，干し果物，米などが航海中を通して出された。肉は日曜日を除いて，毎日メニューにあった。野菜は曜日毎に同じ野菜が繰り返し出された。新鮮な野菜や果物の不足はときには壊血病をもたらした。コーヒーは朝，紅茶は夜に出された。ビスケット，バター，砂糖が週に二度配られた。飲料水は時が経つと，とりわけ熱帯に近づいたとき，汚れて臭くなったので，ワインが支給された。雨が降らない場合は，洗濯用の水も乏しかった。船の長旅は決して快適なものではなかった。船上では死者も出たのである。[26]

しかしこのような苦労の末ついにゾルブの人々は彼らが待ち望んでいた南オーストラリアの新しい土地，すなわち約束の地に着いたのである。[27]

3. 南オーストラリアの移住地「エベネツァーとペーターズヒル」

アドレイド港は当時ほとんどのヨーロッパからの移民がオーストラリアへ入る玄関のようなところであった。1838年からすでに多くのドイツからの移民がこの港を通ってオーストラリア各地に散っていた。従ってこれらドイツ人移民が1848年のゾルブ人移住の舞台を設定したとも言えよう。ドイツ人移民運動に触発されて，顕著な移民運動がゾルブの人々の間に拡がり，最初の[28]ゾルブ人グループ二つが1848年の革命の年[29]にラウジッツを去り，ヴィクトリア号[30]とアルフレート号[31]で南オーストラリアへ向かった。一つのグループは1848年にホフヌングスタール（希望の谷）の地域に移住し，もう一つのグループは1848年にローゼンタール（バラの谷）に移住地を見いだした。このようにしてゾルブ人の移民は始まり，以後1858年のピークを経て1860年代まで続くのである。[32]

そしてこの一連の移民運動の中で最も注目すべき移民グループは，ヨハン・ツヴァール[33]に率いられて，ヘレーナ号[34]で1851年12月にアドレイド港に上陸した98名の上ゾルブからの人たちに

よるものであった。この移民グループは「ルター派教会」に属していて，他のほとんどのグループが主として経済的理由から移住してきたのとは違って，強い宗教的信念に基づいて移住してきた。この上ゾルブの人たちはこと宗教問題になると，思慮深い識別力を発揮した。彼らの南オーストラリアへの移住は，宗教的見解および理由によって駆り立てられたと言っても良いであろう。

このグループの指導者ツヴァールは平信徒であったが，すでにドイツにいたときに，自分たちの信仰共同体の居場所を新たに建設しようと言うヴィジョンを描いていて，そのためにゾルブ人牧師を勧誘しようと試みていた。彼は移住の準備をするためライプツィヒに行き，十字架，宗教書，教会の鐘などをもとめた。そのさい彼は，ゾルブ出身の当時神学生であったコルラ・アウグスト・イェンツ[35]に会い，学業を終えたら南オーストラリアへ来て，彼らの信仰共同体の牧師として，指導して欲しいと頼んだ。しかしイェンツは，後にゾルブ民族運動の著名な人物となり，結局南オーストラリアへ行くことはなかった。

ツヴァールの一行がヘレーナ号からアデレイド港に上陸したとき，ツヴァールはグループの一人アンドレアス・ポルニッヒを前もってローゼンタールに派遣して，そこのゾルブ人たちに彼らの到着を告げさせた。というのは，ローゼンタールのゾルブ人たちがこの土地を去って，ヴィクトリア州へ行く計画を立てていると聞いたからである。そこで彼らは，アデレイドの近くに全構成員が住める適地を見付けるのが難しかったこともあり，さらにヘレーナ号に乗船してヴィクトリア（州）へ行くことを考えた。しかし丁度小麦の収穫時で，ローゼンタールのゾルブ人たちは収穫の手助けを必要としていたので，ヘレーナ号に乗船しないように引き留めた。そしてもし彼らが小麦の収穫終了時までに土地を探し出せないときには，自分たちも一緒に陸路でヴィクトリア（州）へ行くことにすると説得した。そこで一行はアデレイドで必要な品々を整え，ローゼンタールへ赴き，その周辺に宿泊した。一行は滞留を続け，金銭を得た。[36]

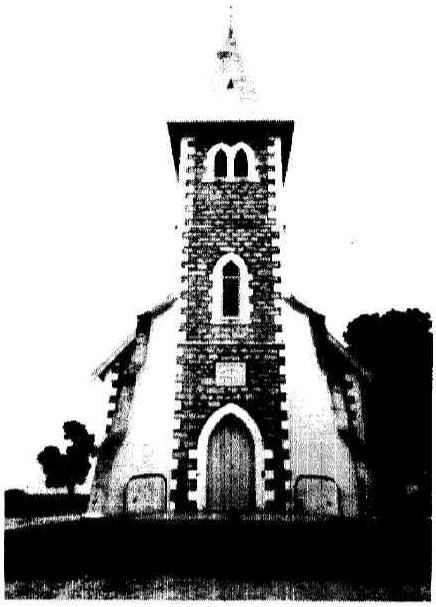
ローゼンタールは，1848年にアルフレート号でハンブルクを出発した上ゾルブの人たちが1849年から新しい入植地（本来はザクセンルーエと呼ばれていた[37]）を開拓し，約50人ほどで共同体を築いていた。ベターニエンのマイヤー牧師がこの信仰共同体の世話をし，ペチェル家の敷地に教会が建立された。この共同体のほとんど全員はゾルブ人であり，ローゼンタールはオーストラリアにおけるゾルブ人最初の移住地であった。ツヴァールの一行は地元の教会信徒と信仰上のことで討論をたたかわせ，相互に理解し合った後で，礼拝集会に出席することが許された。

ツヴァールはその間も土地探しを続けていたが，幸い土地を獲得する好機に恵まれ[38]，上部バロッサ・ヴァレイのヌリオートゥパの北に位置するエベネツァーに入植した。バロッサ・ヴァレイはアデレイドの北60キロにあり，極めて短期間のうちに南オーストラリアにおけるドイツ人の中心地に発展していた。1830年代の終わりにプロイセンからルター派の信徒たちが最初の宗教的亡命者としてこの谷にやって来て，1842年に最初の移住地ベターニエンを設立していた。ツヴァール一行の殆どの人たち（70名）[39]は一緒に移住し，ゾルブ人定住地を造った。したがってエベネツァーは南オーストラリアにおける上ゾルブ人による第二番目の移住地となった。しかし5家族[40]は行動を共にせず，ローゼンタールのゾルブ人たちとヴィクトリア（州）へ移住することになり，翌1852年陸路をヴィクトリア（州）へ旅立ち，ホッホキルヒ[41]という名の移住地に定住した。

しかしエベネツァーでは，彼ら一行は，信仰共同体の精神的指導者で，纏め役でもある牧師を欠いており，また他のゾルブ人同胞社会から完全に分離されて，ドイツ人社会やイギリス人社会の傍らに小さなゾルブ人社会を造って，その中でツヴァールを共同体の長として移住生活を始めた。それでもツヴァールの設立したこのエベネツァー移住地はゾルブ人入植地としては当時南オーストラリア最大のものであった。彼らはこの地に長年待ち望んだ彼ら自身の信仰共同体をようやく形成できるという希望を抱いたのである。

エベネツァー信仰共同体の最初の礼拝集会は一行のアンドレアス・シュナイダーの家で行われ

た。ローゼンタールとベターニエンを受け持っているドイツ人牧師ハインリッヒ・A・エードアルト・マイヤーがこの新しいゾルブ信仰共同体を1854年まで司牧した。その後ヘルンフート同胞



現在のエベネツァー教会

教会牧師クリストフ・S・D・ショーンドルフが後任として来た。彼はドイツ人であったが，ゾルブ語が出来たので，ゾルブ語で説教をすることができた。ツヴァールとほとんどのものたちはゾルブ語での説教を好んだが，必ずしもグループの全員がショーンドルフ牧師を歓迎したわけではなく，そのために若干のメンバーはこの信仰共同体を去り，ちょうど近くのノイキルヒに新しい信仰共同体をつくりつつあったドイツ人たちに合流した。そしてそこにドイツ人とゾルブ人による新しい信仰共同体を形成した。マイヤー牧師がノイキルヒのこの新しい信仰共同体の初代牧師となり，1853年にエベネツァーの近くに移ってきたアダム・バルチュの家で礼拝を執り行い，このグループを指導した。

エベネツァーとノイキルヒの二つの信仰共同体の分裂はますます深まっていった。そして1859年には両共同体はそれぞれ教会を建て，献堂式を行った。その後エベネツァー信仰共同体は，タヌンダ—ライトパス・ルター教会会議に加わり，それとともにショーンドルフ牧師は去り，他方ノイキルヒ信仰共同体はベターニエン—ローゼンタール・ルター教会会議に所属することとなった。[42] こうして二つの信仰共同体は全ての関係をお互いに完全に失ったのである。

エベネツァー信仰共同体の分裂はゾルブ人共同社会の存立基盤を損なうものとなった。一行のうち幾人かのものたちは，ゾルブ語の使用よりもルター派信徒として教義を重要視し，さらに移民生活を送る上でドイツ語の方が便利であり，快適であると考えた。それに対して残りの他のものたちはゾルブ語の維持により関心があった。しかし何れの場合もゾルブ人の共同体はやがてドイツ人共同体の一部となり，1859年に教会建立以後はエベネツァーにおいてさえ，礼拝はドイツ語で行われるようになった。家庭内の礼拝や個人の家で行われる祈祷集会ではゾルブ語が用いられたが，しかしこうなるとゾルブ語が忘れ去られるのは時間の問題であった。ゾルブの人々の間にはもはや以前のような団結はなく，またゾルブの生活様式や習慣を守り，維持しようとする強い意志がグループ全体として無くなったからである。ゾルブの文化や伝統を保持しようとする試みはいまや移民生活を快適に送るという経済的理由に道を譲ってしまったのである。

ヨハン・ツヴァールは，いわゆる「ヘレーナ」号移民団を組織し[43]，グループの引率者としてなんとしても南オーストラリアにゾルブ人の新しい信仰共同体を設立し，ゾルブ人牧師の指導の下で理想郷を築き上げようと強く願っていた。しかし彼のゾルブ人のみの移住地設立とゾルブ人牧師獲得の計画は残念ながらどちらも実現しなかった。ゾルブ人牧師を獲得しようとする努力の失敗に終わったことが最終的にエベネツァーをゾルブ人の中心的移住地にすることが出来なかった最大の理由かも知れない。信仰共同体にとって牧師の存在は極めて大きかったのである。ツヴァールは92歳でこの世を去るまで人生の残りの日々を平信徒の宗教指導者としてここエベネツァーの信仰共同体に奉仕しながら送った。

ここでもう一つのゾルブ人移住地ペーターズヒルの例を見てみよう。

ヨハン・ツヴァールの墓

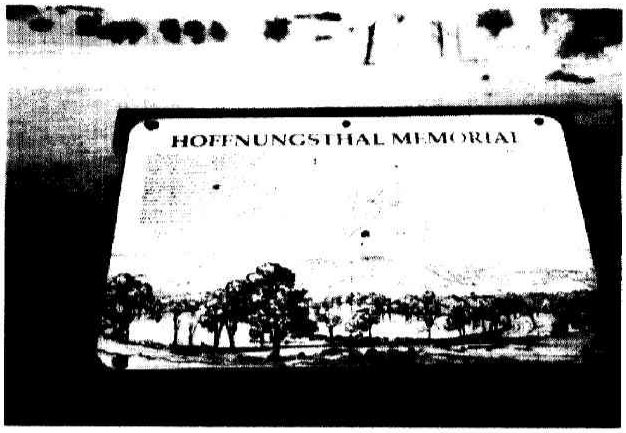
ここに移住してきた人たちは，エベネツァーの人たちとは違って，下ラウジッツからのゾルブ人たちであった．このグループはこのペーターズヒルにエベネツァーと並ぶゾルブ人の本格的な信仰共同体を建設した。彼らはこの土地に到着すると，井戸を掘る前に祭壇をたてたという創世記のベエルシェバの故事を想起しながら，すぐに礼拝集会用の小さな建物と学校を建てたと言う。礼拝はすでに教会が建てられる前に始まったが，最初の礼拝はヨハン・ノーアクの家で行われた。1856年にこの信仰共同体が設立されて以来，ベターニエンのマイヤー牧師がその面倒を見たが，彼は他の信仰共同体への責任も果たさなければならず，その上距離が遠いので，年に4回しかやって来なかった。彼は来ると1週間滞在し，子供たちに教え，礼拝を執り行った。彼はゾルブ語が出来ず，ドイツ語のみを使ったが，この信仰共同体の人々に好まれ，1861年に死去するまで務めた。マルティン・ホンドウが教会の長老として，牧師を補佐し，人々の世話をよくし，50年以上もこの信仰共同体のために尽くした。さらにゾルブ語の説教集を持っていたマテス・ボラックとマルティン・テシュナーが，マイヤー牧師の不在の間，ゾルブ人同胞を自宅に呼び，毎日曜日にゾルブ語の説教集による礼拝を指導した。ペーターズヒルはそれ故エベネツァー以外ではゾルブ語の礼拝を行った唯一のゾルブ信仰共同体であった。さらに新しい移民や洪水災害に見舞われたホフヌングスタールからの移住民も加わってきた。

しかしここでも信徒の間に軋轢が生じ，分裂が起きた。エベネツァーの場合は教義上の，あるいはゾルブ語が原因であったのに対して，ペーターズヒルでは，むしろ個人的な人間関係に基づいたものであった。たとえば，マルティン・レーマンが夕べの礼拝を指導すると，クリスティアン・ヤーリックは出席したがらず，ヤーリックが礼拝を指導すると，こんどはレーマンが欠席すると言った具合であった。また，争いが原因で，死者を教会の共同墓地に埋葬できないという事態まで生じた。[44]このようなことから，時の経過とともに多くの人たちがこの地を去り，ヴィクトリア州や南オーストラリアの各地に移り住んで行った。ペーターズヒル小教区は独立を止め，一時的にカールスルーエ共同体に，最終的にはユードゥンダ信仰共同体に所属することになった。平信徒同志だけではお互いに信仰共同体内での善意の関係を維持するのが難しかったと言える。このように牧師が指導者としていないところでは，内部的な争いや分裂は絶えずあり，信仰共同体には付き物であったとも言えよう。ルター派の信徒たちはたしかにオーストラリアに於いて望んでいた信仰の自由を獲得したが，このような際限のない兄弟（同志）喧嘩によって分裂という大きな代償を支払わなければならなかったのである。[45]

ところで最後にゾルブ人の最初の移民グループが移住したホフヌングスタールについて少し見てみたい。

ここは初めてこの地に移住してきたドイツ人たちがドイツ語でホフヌングスタール（希望の谷）と命名したように，彼らにとってはまさに待望の土地，南オーストラリアで彼らの将来を約束してくれる場所であった。この彼らの夢と希望を実現させてくれるはずの場所で，彼らは希望に燃え，野を切り開き，耕地を広げ，新しい共同体を作り，そこに信仰の礎を築くべく努力した。そしてまさに彼らの苦労が報いられたその時に，思いも寄らぬ自然災害によって，この共同体はあっという間もなく破壊され，彼らの長年の労苦は無駄となり，

彼らの夢は潰え去ったのである。彼らはまさに天国と地獄を彼らの思いの全てが入ったこの地で味わったのである。



ホフヌングスタールの記念碑

この約束の地「希望の谷」は，穀物が植えられた美しい畑，牧草地と果樹園があり，道を挟んでドイツ風の小さな家が軒を連ねた，絵のような所であった。大きな石造りの教会が高台の上に建てられていた。ベターニエンのマイヤー牧師が一時的にこの信仰共同体を指導し，アデレイドのアンドレアス・カプラー牧師が後を継いだ。カール・クリューガー[46]によって製作された素晴らしいパイプオルガンも備え付けられた。学校もあった。かつてラッハラウで教師をしていたペーター・ブリュールが教えていた。そしてここにはさらに移住をしてくる人々に対してなおスペースがあった。新しいルター派の信仰共同体を作っていたドイツ人たちは，ドイツからの新しい移民であれば，彼らの共同体を築き上げるのに共に参加しようとする意志がある者なら，誰でも歓迎した。そこでゾルブの人たちも移住してきたのである。彼らはプロイセン，即ち下ラウジッツからの移民であった。[47]ドイツの酷い貧困と飢餓から抜け出して，一行の幾人かは生き長らえることが出来なかったほど消耗した航海の末に，ようやくたどり着いた未知の国オーストラリアで，新しい移民たちは自分たちに多くを約束するであろう特別な地域，ドイツ人たちが期待をいっぱい込めて，ホフヌングスタールと呼んでいたこの移住地にやってきたのである。彼らはこの地に落ち着き，ドイツ人，ゾルブ人ともどもこの谷の住人たちは，高いユーカリの樹木が立っている丘が周りをぐるりと取り囲んで集落を保護している牧歌的な自然環境の中で，恵み豊かな生活を送っていた。ここには120の農園があった。[48]

ところが，1953年10月のある夜異変が起きた。1週間にわたる猛暑と激しい雷を伴った嵐があり，36時間土砂降りの雨が続いた。夜中に家に浸水があり，谷はあっという間に3メートルの水に覆われた。谷はダムのようになった。彼らは盆地に家を建てていた。追い出された住民たちは，谷から水を排水させる方法がないので，ほとんどのものは再びこの谷に戻ってはこなかった。苦労の年月が徒労に終わったようであった。生まれた国で生きるために人生の半分をたたかった後で，彼らは遂に新しい故郷をここ南オーストラリアに見出したと思った。それなのにこの結果である。しかし信仰深い人々は，神の無慈悲を恨まず，この悲惨さを神の厳しい試練と受け止め，神は弱い者によってその王国を建てられるのを望まず，艱難辛苦を与えたと考えた。そして彼らは，悔やみ罪を清めて，新しい土地に主イエスキリストの福音を伝えようという決意を持ってこの谷を出ていったのである。ゾルブの人たちはほとんどが北のペーターズヒルへと向かい，若干の人たちは隣のヴィクトリア州へ向かった。

このように彼らの地上の楽園は姿を消し，今では，人間的営為の成功と失敗を呑み込んでしまった美しい自然の中に僅かに当時の教会の土台の跡が残されているのみである。それが，かつてここ

ホフヌングスタールの教会の跡地

に多くのドイツ人とゾルブ人にとって「希望の谷を」があったことを示している。まさに栄光の後で悲惨が劇的に起こったこの移住地は，その名前の持つ響きとともに，ドイツ人移民のみならずゾルブ人移民にとっても忘れることの出来ないものなのである。

4. 同化への道

ゾルブの人たちは南オーストラリアでは彼らの信仰共同体を指導してくれるゾルブ人牧師がいなかった。学校ではゾルブ語を教える教師を欠いていた。教会や学校で牧師や教師を欠いていたのは，ゾルブの文化を生き長らえさせる点では，決定的なマイナス要因であった。教会はドイツ人牧師の指導下にあり，学校の教師も1～2の例外を除いてドイツ人であった。しかもゾルブ人のほとんどがドイツ語を理解した。そのためドイツ人共同体への同化が急速に進んだのである。さらにゾルブ人移民の第一世代はドイツ人と結婚して家庭を築いているケースが多い。このことも同化を促進することとなった。ここで当時のゾルブ人の結婚を統計で見てみよう。[49]

	下ゾルブ出身者	上ゾルブ出身者
ドイツ人と結婚	52%	65%
ゾルブ人と結婚	38%	27%
イギリス系子孫と結婚	11%	8%

オーストラリアはイギリスの植民地であるという成り立ちからみて，ゾルブの人たちは圧倒的多数（全人口の約9割）のイギリス系の人たちと交流し，その社会に吸収されて行くように思われるが，そうはならなかったことをこの統計は示している。そしてそうならなかった理由としては，第一にゾルブの人々はドイツ本国においてドイツ人と混住ないしは隣接して住んでいて，いわば隣人同士であったこと，第二にそのためドイツ語が出来たこと，第三にルター派の同じ信仰を持っていたこと，第四に同じような動機や理由で移民をし，しかもほぼ同時期に同じ土地に移民したこと，などが考えられるであろう。

ゾルブの人たちはドイツ本土での経緯はあるにせよ，移民としての生活を円滑に送るために，先ず周囲のドイツ人たちとの交流を深めたのである。そのため，最終的に彼らはイギリス系主流のオーストラリア社会に吸収されて行くにせよ[50]，その前段階としてドイツ人共同体と交わることによって，その中に吸収され，同化されて行ったのであろう。そして第二世代ではゾルブ語を話せるものがほとんど消えてしまう結果となった。かくしてゾルブ語を忘れてしまった世代は，ゾルブ人というよりもドイツ人であるという意識を持つようになったのである。

ゾルブ人とドイツ人の間では同化の力がことのほか強く，彼らがオーストラリアに着いたときから，すでにその力が働いていた。ゾルブ人とドイツ人が結婚する場合，家庭内の言葉はドイツ語になった[51]。上ゾルブ出身者と下ゾルブ出身者が結婚した場合でも，両者の話す方言に違いがあるため，ほとんど大部分のカップルはドイツ語に切り替えるということが起きた。いずれにせよこのようにして，ほとんどのゾルブ人はドイツ語を日常的に話す共同体の中で住んでいたので，同化は程なく完了したのである。オーストラリアは英語社会であるのに，ゾルブの人々は英語に移行するのではなくて，ほとんど全員が，先ず第一にドイツ語へ移行したのは，きわめて興味深い出来事である。

言葉は言うまでもなく民族としての自覚を保つものであり，民族の証であり，アイデンティティそのものであると言えよう。南オーストラリアでゾルブの人たちが言葉を失っていく過程は，それゆえゾルブ人がドイツ人共同体へ吸収され，同化されていく道でもあった。その意味で南オーストラリアにおけるゾルブ語の在り方は，同化と深く係わっているので，ここでゾルブ語の消長についてゾルブ人の主要な移住地エベネツァーを手掛かりとして見てみたい。

一般的に見て，オーストラリアでゾルブ語を維持するにはことのほか不利な状況があった。純然たるゾルブ人だけの移住地はなく，ゾルブ人の教師や牧師も居なかったからである。そのため学校での授業や教会の礼拝は至るところドイツ語で行われるのがごく普通であった。その点，南オース

トラリアのエベネツァー信仰共同体はいささか例外的であったといえる。

エベネツァー移住地は，ツヴァールが同志とともにゾルブ人の信仰共同体，すなわち彼らの理想郷を実現すべく設立したものであった。ツヴァールの考えでは信仰と同時にゾルブ語の維持が理想郷の実現のために重要であった。ここではゾルブ人牧師指導の下でゾルブ語による礼拝を行い，かつゾルブ人だけの信仰共同体を維持することになっていた。そしてゾルブ語を保持し，さらに発展させるためには若い世代へゾルブ語教育を行う学校も必要であった。そしてエベネツァーでは当初ゾルブ語を維持するために様々な試みがなされたのである。

先ず，エベネツァー共同体の人々は学校を開設し，コルトニッツ出身のヨハン・ダルヴィッツを教師として雇った。彼の父親は貧しい農民でゾルブ語聖歌の著名な作詞家であった。敬虔な両親の家で成長して，彼はコルトニッツの秘密集会[52]のメンバーであった。彼はヨハン・ツヴァールおよびゾルブ・ルター主義運動の指導者たちと同志としての友情で結びついていた。そこでダルヴィッツは妻と5人の子供を連れて彼らと一緒に1851年へレーナ号で移住してきていた。

エベネツァーの信仰共同体は全ての人が彼を教師に任命したことに全く満足した。[53]ダルヴィッツは，ゾルブ語で授業をしたオーストラリアで唯一の教師であった。ヨハン・デッケによると，ダルヴィッツは子供たちにゾルブ語とドイツ語で教えたとのことである。最初の頃ゾルブ人学校に通

エベネツァーのゾルブ人学校の廃屋

ったヨハン・ツヴァールの娘マリアもこのことを確認している。エベネツァーの子供たちは聖書と賛美歌集をもとにしてゾルブ語の読み，場合によっては書き方を学んだ。1863年にヨハン・ダルヴィッツが余りにも早く47歳で死去すると，彼の息子アンドレアス・ダルヴィッツが後継者として任命された。しかし彼の早すぎる死とともにエベネツァーのゾルブ語教育は事実上終わったのである。彼の息子がゾルブ語の授業をしたかどうかは不明である。

教会に於けるゾルブ語の使用に関してもまたエベネツァーは例外的であった。オーストラリアにおける唯一のゾルブ人共同体としてエベネツァーには一時的に，ゾルブ語に通暁していたヘルンフート同胞教会のクリストフ・ショーンドルフ牧師がいた。彼は本部から南オーストラリアに移住した教区民を世話するために派遣されていた。彼はライトパス共同体を引き受けていたが，エベネツァーの信仰共同体から，ラウジッツからゾルブ人の牧師が来るまで，共同体を指導してもらいたいとの依頼を受けた。エベネツァーの信仰共同体にとって“ゾルブの民族性とゾルブ語を維持すること”は非常に大事なことであると，ショーンドルフ牧師は判断した。それで彼は要請に応じた。彼は1837年から1845年までクラインヴェルカで司牧している間にゾルブ人たちと知り合い，そのさいゾルブ語を覚えた。それでエベネツァー信仰共同体ではゾルブ語で説教し，礼拝を行うことが出来た。ヨハン・ブリュールはショーンドルフ牧師がゾルブ語で説教したのをしっかりと覚えている。しかしきわめて遺憾なことに彼は1856年に教団の指令でベーテルに信仰共同体を作ることになり，エベネツァーを去った。しかしエベネツァー信仰共同体の強い要請があり，月に一度エベネツァーへ行った。しかし1859年に彼は大きな事故に遭い，もはやエベネツァーへ行くことが出来なくなった。このようにしてエベネツァーの教会の礼拝からゾルブ語が消えた。ショーンドルフ牧師がゾルブ語で司牧したのは1854年から1859年までの5年間であった。

そこでエベネツァー信仰共同体は，今やラウジッツからのゾルブ人牧師の着任も不可能であり，

ゾルブ語の礼拝を続けるのは無理であると判断して，ドイツ人牧師のいるドイツ人共同体との合同を選択した。かくしてゾルブ語の使用は教会の礼拝ではなくなり，いまや定期的に集まる祈祷集会においてのみに限定された。ゾルブ語の家庭礼拝や聖書朗読祈祷は初期の頃には他の移住地でも行われていた。[54]移民初期の頃にはゾルブ語の印刷物への需要が比較的強く，多くのものたちが宗教書をラウジッツから取り寄せていた。

家庭でのゾルブ語の使用が無くなりだしたのは様々である。例えば，エベネツァーのアンドレアス・デッケは,彼自身と妻はゾルブ人であるのに,すでに1856年には家庭内ではもっぱらドイツ語を話していたと述べている。アンドレアス・アルベルトは移民後ほどなくしてドイツ語に切り替え，ごくまれにゾルブ語の単語がドイツ語に混ざる程度であった。[55]

ドイツ語の強い影響下でゾルブ語は家庭内の言語としても永続きすることは出来なかった。ゾルブ語を話す家庭の子供たちは大部分ルター派の学校へ通った。そこでは午前中はドイツ語，午後は英語で授業を受けたので，子供たち，すなわち第二世代はこの二つの言語を瞬く間に身につけた。ゾルブ語の使用は家庭内に限定された。子供たちは，両親に対する尊敬の念から家では依然としてゾルブ語を話していたが，成長するにつれてゾルブ語で正確に表現するのがだんだんと難しくなり，両親や特に祖母が死んだ場合，その家族ではゾルブ語が消滅し，ドイツ語のみが話されるようになったのである。グナーデンタールのカール・ヘムペルは，彼の家ではゾルブ語とドイツ語が話されている，と手紙に書いている。[56]

エベネツァーに理想郷を設立しようと移住してきたゾルブ人たちは上ラウジッツからの人たちであった。彼らはオーストラリアにおける唯一のゾルブ人移住地としてエベネツァーを純然たるゾルブ人信仰共同体として築き上げるべく努力したが，あらゆる努力は成果をあげずに終わった。ヨハン・ツヴァールのもとでエベネツァー信仰共同体はゾルブ・ルター主義運動に固執しすぎたのかも知れない。しかしたとえ僅かでの間であったにせよ，エベネツァー信仰共同体の意志として，学校でゾルブ語が教えられ，教会でゾルブ語の説教や礼拝が行われたことは記憶に留めて置いてよいであろう。

エベネツァー信仰共同体の記念碑

かくしてゾルブ語は最終的にはゾルブ人の家庭からも消えていった。ドイツ語がゾルブ人の使用言語となり，ドイツ語の使用とともにゾルブ人たちはドイツ人に同化していったのである。

そうした中で生涯ゾルブ語を話した第一世代最後の人を挙げておこう。

マリア・フパッツはプロイセン(下ラウジッツ)のコルクヴィツで1835年に生まれ，南オーストラリアのリヴァートンで1936年に101歳で亡くなった。彼女はゾルブ語を好んで話したが，晩年には彼女の話すゾルブ語を理解できるものはもはやいなかったと言われている。[57]

おわりに

ゾルブの人たちがオーストラリアへ組織的に移民を始めた19世紀中頃には，先達のドイツ移民のお陰もあって，移住地としてのオーストラリアに関する情報もかなり詳しく知られるようになり，南オーストラリアは利用可能な移民先の土地として認識されていた。またこの頃には交通手段も改善され，整備された。そこで特に下ラウジッツのゾルブ人たちは経済的に不安定な状態から脱して，よりよい生活を求めて，新しい土地へ向かったのである。[58]

しかし同時に，単に経済的自由からだけではなくて，十数年前のプロイセン・ルター派の先例に倣い，自分たちの信仰共同体を新しい土地に築き

上げようという宗教的信念から移住してきた上ラウジッツのゾルブ人たちもいたのである。

ゾルブの人たちはいずれの場合も故郷ラウジッツに於ける彼らをめぐる社会的逼塞状況，すなわち政治的抑圧，宗教弾圧，人口過剰，飢饉などの経済的困窮から抜け出して，新しい土地で新たな生活を築くべく南オーストラリアへ移住したのであった。これは，換言すれば，旧世界から新世界への脱出であったとも言えよう。

こうしてゾルブの人たちは新しい移住地で新しい生活を始めるが，その場合先住移民のドイツ人との関係を忘れてはならないだろう。

ドイツではゾルブの人たちは必ずしもドイツ人とは良好な関係をいつも保っていたとは言えないが，ここ南オーストラリアではむしろ両者は緊密に結びつき，ドイツ本国では見られなかった友好な関係を築き上げたのである。これは歴史の皮肉とも言えることであるが，それが現実に起こったのである。

移民の初期の頃は，ゾルブの人たちは，彼らに先立って10年ほど前にこの地にやって来て，すでに定着していたドイツ人たちによって，隣人として援助され，受け入れられた。この二つの民族の間にあった昔からの長年にわたる敵意は，ゾルブの人々がこの地に来て，もはや以前の不公平や抑圧や摩擦には晒されないことがわかったとき，解消された。ゾルブ人とドイツ人は，この共に住むことになる土地で同じ争いや機会を分かち合いながら，同じレベルで出会うことが出来るようになったのである。そしてより重要なことは，彼らが民族の垣根を越えて，同じ信仰共同体において理解のある牧師たちの指導の下で共通の信仰によってお互いに結びついていたことである。両民族の間で結婚が頻繁に行われ，二世代の間に一つの民族のようになった。このようにしていわばゾルブ人のドイツ人への同化が起きたのである。

そしてこのことから学ぶべきことは多いと思われる。しかしオーストラリアではゾルブ民族とドイツ民族の同化の歴史はほとんど知られていないと言う。多民族共生，多文化共存の観点から見ると，多文化主義[59]を国是としているオーストラリアにおいてこそゾルブ人の同化の歴史は忘れ去られるべきではなく，周知させられ，かつ然るべく評価されてよいであろう。

確かに，ツヴァール一行の「ヘレーナ」号移民の見地からすると，民族の存立，その基盤としてのゾルブ語の維持・発展，固有の信仰共同体の保持は絶対的なものであった。しかし，その後のゾルブの人たちに見られる分裂が示しているように，新しい大地で，しかもそれほど多くない人数で，閉鎖的すぎるとも言えるゾルブ民族だけの信仰共同体を維持し，発展させることは困難であったと言えよう。

ヨハン・ツヴァールが150年前に南オーストラリアにゾルブ人の理想郷を築こうとした試みは挫折したが，しかしその精神は引き継がれ，今日改めて装いを新たにして復活しつつあるといえる。すなわち同化ということを前提とした上でゾルブの人々の間では，すでにドイツ人の中に見られるように，民族のアイデンティティ確立を目指し，民族のルーツに迫ろうとする試みが近年着実になされてきている。[60]いわば民族的覚醒，あるいは自立とも言える動きであるが，しかしこの動きは決して自民族のみに限定された偏狭的なものではない。むしろこの国の多文化主義の流れの中で静かにわき出てきた自己存在を問う動きであると言ってよいであろう。いわば同化を経験した後で，自らの民族としての存在を再確認し，その上で改めて他民族との共存・共生を追い求めることにほかならないのである。そして私たちはここに他民族との共生を会得し，他文化との共存に生きるゾルブの人たちの，かつてこの地に理想郷を求めて移住してきたゾルブ人子孫の未来に向けての一つの明確かつ積極的な生きる姿勢を見ることができるのである。

【注】

1) 山田史郎「移住と越境の現代史」，監修　望田幸男・村岡健次「近代ヨーロッパの探究1移民」，1998年，7頁。
2) 矢野　久「初期工業化の時代―19世紀初頭―1871年―」，矢野　久／アンゼルム・ファウスト編「ドイツ社会史」，2001年，23-26頁。
3) 山田史郎，前掲書，6頁。
4) 中村浩平「自由の大地を求めて―南オーストラリアに於けるドイツ移民―」，人文学研究所報　No.

33, 2000年，参照。

5) Ian Harmstorf & Michael Cigler: The Germans in Australia, 1985, S. 48.さらに南オーストラリア（州）アデレイドのThe Migration Museum所蔵の「ゾルブ人」資料によると，「1836年から1848年までの間にドイツ移民に混じってゾルブ人数家族が南オーストラリアに来た」が，詳細は不明で，事実関係は未確定である。

6) 中村浩平「ドイツの少数民族「ゾルブ」—その抵抗の民族としての一断面—」，神奈川大学人文学研究所編「国家とエスにシティ—西欧世界から非西欧世界へ—」，1997年，参照。

7) Ian Harmstorf & Michael Cigler: a. a. O., S. 49.

8) a. a. O., S. 49.

9) 小論で扱う19世紀前半のラウジッツは，プロイセンとザクセン，そして今日ポーランド領になっているシュレージェン（当時はプロイセン領）からなっていた。

10) George R. Nielsen: In Search of a Home. Nineteenth-Century Wendish Immigration, 1989, S. 7.

11) このいくつかは，後にゾルブ移民がオーストラリアへ持参し，そのコピーは南オーストラリア（州）ノース・アデレイドのThe Lutheran Archivesに保存・保管されている。

12) George R. Nielsen: a. a. O., S. 9.

13) a. a. O., 11-12.

14) 山田史郎，前掲書，12-13頁。

15) 前掲書，2-4頁。

16) George R. Nielsen: a. a. O., S. 14.

17) The Lutheran Archives（南オーストラリア州ノース・アデレイド）所蔵の「ゾルブ族」に関する未公刊資料に基づく。

18) 櫻井健吾「近代ドイツの人口と経済—1800-1914年—」，2001年，171-172頁。

19) 櫻井健吾，前掲書，187頁。

20) 前掲書，154-155頁。

21) The Lutheran Archives（南オーストラリア州ノース・アデレイド）所蔵の「ゾルブ族」に関する未公刊資料「手紙：整理番号32」に依る。

22) Trudla Malinkowa: Ufer der Hoffnung, 2. überarbeitete Auflage, 1999, S. 40. ここには次のような相反する記述がある。「最大の問題は水不足である。泉は稀で，あっても，夏の灼熱下で枯れてしまう。」

23) 当時のドイツの銀貨。普通の労働者の1日分の賃金。1ターラーは24グロッシェン。

24) George R. Nielsen: a. a. O., S. 31. このような好意的な手紙を書いたのは南オーストラリアに移民した人々に多く見られるとのことである。

25) Ronald Parsons: Migrant Ships for South Australia 1836-1866, 1999, S. 15.

26) a. a. O., S. 24-31. に基づく。航海中の様子が詳しく記録されている。なお，同様の記録はGeorge R. Nielsen: a. a. O., S. 26. にもあり，ここには死者の弔いの様子が書かれている。

27) Ronald Parsons: a. a. O., S. 46.

28) George R. Nielsen: a. a. O., S. 24-24. なお，個人として最初にオーストラリアへ渡ったゾルブ人は1844年にシドニーに定住したモラヴィア同胞宣教会のヤン・リヒタールである。次に教師のペーター・ブリルが来たが，農業をするため南オーストラリアのリンドック・ヴァレイに行った。

29) Trudla Malinkowa: a. a. O., S. 18. 櫻井健吾，前掲書，188-189頁。なお，櫻井氏はここで通説に対して近年の研究成果を基に異論を唱えている。

30) Ronald Parsons: a. a. O., S. 156. 3本マストのバルク船，380トン，1839年ハンブルクで建造，所有者：J. C. Godeffroy & Sons, 登録港：ハンブルク。1848年6月15日ハンブルク港出帆，リオ・デ・ジャネイロ経由で1848年11月6日アデレイド港到着。入港登録1848年11月8日，船長：J.H.O. Meyer, 144日間にわたる長い航海。

31) a. a. O., S. 60. 3本マスト船，562トン，1841年スウェーデンのウーレオで建造，所有者：J. C. Godeffroy, 登録港：ハンブルク。1848年8月20日ハンブルク港出帆，1848年12月6日アデレイド港到着。入港登録1848年12月9日，船長：H. E. Decker.

32) George R. Nielsen: a. a. O., S. 18.

33) Johann Zwar. 1821年10月16日にDrehsa (Preussen/Sachsen)で生まれる。1914年7月15日南オーストラリアのエベネツァーで死去。Homeopathic Doctor.（南オーストラリアState Libraryの入国記録および移民記録に依る。仔細は割愛。）

34) Ronald Parsons: a. a. O., S. 101. 3本マストのバルク船，294トン，1851年ライアーシュティークで建造，所有者：J. C. Godeffroy & Sons, 登録港：ハンブルク。1851年8月16日ハンブルク港出帆，1851年12月24日アデレイド港到着。入港登録1851年12月26日，船長：不詳。

35) Geschichte der Sorben, Band 2, Von 1789 bis 1917, 1974, S. 138.

36) George R. Nielsen: a. a. O., S. 31.

37) Trudla Malinkowa: a. a. O., S. 42. ここに移住してきたゾルブ人たちはザクセン (Sachsen) から長旅の苦労の末やっと安息 (Ruhe) を得たので，この地にSachsenruhe「ザクセンルーヘ」と言う名を付けたが，その後ドイツの他の地域からの人々も加わったのでRosenthal「ローゼンタール」に変更したと言う。

38) a. a. O., S. 60.

39) George R. Nielsen: a. a. O., S. 35.

40) a. a. O., S. 35. Burger, Hundrack, Mirtschin, Rentsch, Urbanの5家族。

41) a. a. O., S. 50.

42) a. a. O., S. 36.

43) Trudla Malinkowa: a. a. O., S. 24.

44) a. a. O., S. 65.

45) a. a. O., S. 85.

46) a. a. O., S. 61.

47) 一方ザクセンから来た大部分のものはエベネツァーとザンクト，キッツ*) に新しい共同体を設立した。＊「この移住地は1854年にシュタインヴェル

ダー号で着き，先ず知り合いを頼ってエベネツァーへ行った上ラウジッツからの移民によってエベネツァーの近くに土地を得て設立された。」

48) Trudla Malinkowa: a. a. O., S. 61.

49) George R. Nielsen: a. a. O., S. 60-61.

50) a. a. O., S. 127.

51) a. a. O., S. 97.

52) 中村浩平「自由の大地を求めて—南オーストラリアに於けるドイツ移民—」，21頁。

53) Trudla Malinkowa: a. a. O., S. 88.

54) 例えば，下ゾルブ人の住むペーターズヒルでは，マティアス・バラックたちがゾルブ語の説教集を読んでいた。またグナーデンタール（恩寵の谷）では靴職人アンドレアス・ウルバンの家で定期的にゾルブ語の聖書朗読祈祷が行われた。

55) オーストラリアから出されたドイツ語の手紙の中で差出人は特別な挨拶としてゾルブ語を使っていた。

56) Trudla Malinkowa: a. a. O., S. 91. さらに，ヨハン・P・ノアーク牧師はペーターズヒルで1876年に生まれたが，まだ小さい頃，両親はゾルブ語を話していたが，ほんの数年の内にドイツ語が家庭の言語になったと報告している。

57) a. a. O., S. 91. なお，1957年に南オーストラリアのセヴンヒルで死んだ第二世代のF・ザイポルトは“最後の有名なゾルブ語の話し手”であった。

58) 櫻井健吾，前掲書，153-160頁。

59) 関根政美「多文化主義国家オーストラリアの誕生とその現在」，151-162頁，西川長夫／渡辺公三／ガバン・マコーミック編著「多文化主義・多言語主義の現在　カナダ・オーストラリア・そして日本」，1997年。なお，この小論との関わりで筆者はジョージ・パパナリス「多文化主義への挑戦」（同書243-270頁）に関心を持った。

60) アデレイド（南オーストラリア州）には「Wend Sorb Society of South Australia Inc.」，メルボルン（ヴィクトリア州）には「Wendish Heritage Society Australia Inc.」があり，例えば南オーストラリアでは近年，ゾルブ系市民が年4回の会報出版，各種展示会の開催，ゾルブ人移住地跡の訪問，会員の親睦集会など様々な活動をしている。

Die Sorbischen Auswanderer nach Übersee

——Die Sorben in Südaustralien——

NAKAMURA Kohei

Die wirtschaftliche Not in der Lausitz, die nationale Entrechtung der Sorben und die Unzufriedenheit der sorbischen Bevölkung mit der germanisatorischen Politik der sächsischen evangelisch-lutherishen sowie preussischen unitierten Kirche veranlassten viele sorbische Bewohner der Ober-und Niederlausitz ihre Heimat zu verlassen und nach Übersee auszuwandern.

Schon in den 30-iger Jahren des 19. Jahrhunderts sind etliche Einzelpersonen und kleineren Gruppen emigriert. Die Gruppenauswanderung von Sorben nach Südaustralien begann jedoch im Revolutionsjahr 1848. In den folgenden Jahren stieg die Zahl der Auswanderer vor allem in den Jahren der Wirtschaftskrisen von 1850 bis 1854 an. Die Auswanderungswelle aus der Lausitz erreichte ihren Höhpunkt in 1858 und dauerte bis in die 60-iger Jahren des 19. Jahrhunderts.

In Südaustralien suchten die Auswanderer unter unvorstellbaren Schwierigkeiten und unsagbaren Entbehrungen eine neue Existenz als sorbische Altlutheraner. Darunter gab es 92 Personen unter Leitung von Johann Zwar aus der Oberlausitz. Sie kamen 1851 mit dem Schiff “Helena” in Port Adelaide an. Die Gruppe um Johann Zwar wollte durch die Gründung sorbischer Siedlungen in Südaustralien ihr eigenes Utopia—das so genannte “Reich Gottes” schaffen. Die Zwar-Gruppe nutzte eine günstige Gelegenheit zum Landerwerb und gründete 1852 im Barossa-Tal ihre eigene Siedlung “Ebenezer”.

Nur wenige Siedlungen, zum Beispiel Ebenezer und Peters Hill, wurden allein von sorbischen Auswanderern gegründet. Die Kolonie Ebenezer wurde von Sorben aus der Oberlausitz, die Kolonie Peters Hill von Sorben aus der Niederlausitz gegründet. Trotzdem wurden die religiösen und kulturellen Belange der sorbischen Siedler in den beiden Siedlungen ausschließlich bzw. vorwiegend von deutschen Predigern und Lehrern wahrgenommen. Eine Ausnahme bildete die frühe Zeit der Ebenezer.

Die sorbischen Auswanderer schlossen sich in den meisten Fällen bereits bestehenden deutschen Siedlerungen an und gründeten mit diesen in Südaustralien neue Siedlungen. Sie gaben deshalb bald unter starker deutschsprachiger Umgebung ihre Muttersprache auf und wurden allmählich germanisiert.

In der Kirchengemeinde der Ebenezer wurde unter dem Gemeindevorsteher Johann Zwar konsequent am Geist der sorbisch-lutherischen Bewegung festgehalten. Er plante nicht nur die Gründung einer Siedlung,

sondern auch einer selbständigen Kirchengemeinde. Aus diesem Grund stellte er einen Geistlichen und einen weltlichen Lehrer an. Christoph Schondorf, ein Prediger der Herrnhuter Brüdergemeinde, hielt in Ebenezer von 1854 bis 1859 den sorbischen Gottesdienst und Konfirmandenunterricht. In der Kirche blieb Sorbisch auch weiterhin noch gebräuchlich.

Die Ebenezer Kirchengemeinde stellte auch einen Sorben als Lehrer zur Erhaltung der sorbischen Sprache ein. Unter ihm lernten die Kinder anhand der Bibel und Gesangsbüchern sorbisch lesen und schreiben. Aber nach dem frühen Tod des Lehrers Johann Dallwitz im Jahre 1863 verlor die Schule bald ihren sorbischen Charakter. Zunehmend wurde Deutsch Unterrichtssprache. Die Kinder eigneten sich schnell das Deutsche und später das Englische an. Die zweite Generation sprach nur noch Deutsch und Englisch und nur die Älteren unter ihnen verstanden noch das Sorbische ihrer Eltern. Auf Grund des Mangels am sorbischsprachigen Unterricht sowie wegen des ständigen Kontakts mit deutschsprachigen Nachbarn vergaßen sie folglich die sorbische Sprache. Zwar war die Einstellung zum Gebrauch der sorbischen Sprache in den Familien Südaustraliens unterschiedlich, aber unter dem starken Einfluß der deutschsprachigen Umgebung vermochte sich Sorbisch als Familiensprache nicht auf Dauer zu halten.

Der prominente Führer der Gruppe-Johann Zwar-wollte das Zentrum der Siedler aus der Oberlausitz in Ebenezer bilden. Hier sollte sich die sorbisch-lutherische Kirchengemeinde mit eigener Kirche unter einem sorbischen Geistlichen entwickeln. In der Schule sollte ein sorbischer Lehrer Sorbisch unterrichten. Noch einige Jahre hegte man die Hoffnung, hier eine sorbische Kirchengemeinde zu bilden. Da sich trotz großer Bemühungen kein sorbischer Geistlicher fand, war auch der Versuch der Gründung einer zentralen sorbischen Kolonie endgültig gescheitert. Schon zu Beginn der Siedlungsgründung ging man in Ebenezer allgemein zur sorbish-deutschen Zweisprachigkeit über. Selbst in der Ebenezer Siedlung war es trotz aller Bemühungen Zwars und anderer Mitglieder schwer, die eigene Sprache zu behalten. Der Verlust der eigenen Sprache führte zwangsläufig dazu, dass sich die Sorben der deutschsprachigen Umgebung anpassten und von der deutschen Gemeinde absorbiert wurden. Die Sorben assimierteten sich zuerst an die Deutschen, später wurden sie in die dominante Gesellschaft von englischen Australiern integriert.

Hinzu kam wenige Jahre nach der Ansiedlung noch eine Kirchenspaltung. Aus dieser ging neben der Gemeinde der Ebenezer die Gemeinde Neukirch hervor. Diese Spaltung vertiefte sich und beide Gemeinden errichteten 1959 ihre eigene Kirche. Die lutherischen Auswanderer fanden zwar in Südaustralien die ersehnte Glaubensfreiheit, doch mussten sie diese mit endlosem Bruderzwist teuer bezahlen.

Der Traum der Zwar-Gruppe, in Südaustralien eine neue Heimat der sorbisch- lutherischen Kirchengemeinde zu bilden, verwirklichtete sich leider nicht. Man könnte aber sagen, daß der Geist Johann Zwars immer noch lebendig ist, weil die sorbischen Nachkömmlingen in Gestalt einer neuen Vielfältigkeit mit großem Eifer ihre ethnische Identität zu finden suchen.

キーワード	ドイツ少数民族「ゾルブ」(A german ethnic minority "Sorb" / Eine deutsche Minderheit "Die Sorben")
	移民 (Immigration / Auswanderung)
	南オーストラリア (South Australia / Südaustralien)